医療史跡

ナイチンゲール記章に輝く萩原タケ

近代的な看護婦の養成は1885（明治18）年に我が国最初の看護婦教育所が設立されてから，今日に至るまで140年の歴史を有している[1]（本稿では明治18年から大正4年までの看護教育における全国的な規則の無かった時代背景から「看護婦」と表記する）。萩原タケ（1873～1936年）は，1893（明治26）年に20歳で日本赤十字社看護婦養成所に入学する。

日本赤十字社の前身である博愛社は，1877（明治10）年に佐野常民によって西南戦争の負傷者を救護するために作られた組織である[2]。1886（明治19）年には陸軍の後援を受けて博愛社病院を設立し，日本がジュネーブ条約に加盟した翌年の1887（明治20）年に日本赤十字社と改称した。1889（明治22）年に制定した看護婦養成規則には，「身上ニ何等ノ異動ヲ生ジルモ，国家有事ノ日ニ際セバ，速ニ本社ノ招集ニ応シ，患者救護ニ尽力センコトヲ誓フベシ」と戦時救護の目的が明記され，1893（明治26）年には養成の目的に天災時の救護が加わった[1]。日清，日露の戦争，国内では磐梯山の噴火や三陸大津波等多事多難の時代であり，タケにとっては，日本赤十字社に勤めたことで，その天分を惜しみなく発揮できたのではないだろうか。1900（明治33）年の北清事変では，病院船2隻のうち1隻“弘済丸”の看護婦長に選ばれている（**写真1**：五日市郷土博物館展示）。

1907（明治40）年，皇室（伏見宮家）の山内侯爵夫人のパリ行きに際して，夫人の健康管理のために随行する機会を得たタケは随行終了後も語学研修を希望し，約半年間パリに残り異国での生活を経験した。ヨーロッパ各国を巡りながら，行く先々で病院を訪れ，看護の実際を見聞している。1909（明治42）年7月には，日本赤十字社からの指示により国際看護婦協会（ICN）ロンドン大会に日本人看護婦として初めて参加した。その年，国際看護婦協会名誉副会長に推薦されているが，我が国に看護婦組織が設立されていないため“名誉”の肩書きとなったのである[3]。

帰国後，タケはヨーロッパの看護事情を見学してきた最初の女性として脚光を浴び，帰国1年後には日赤病院の看護婦監督に就任した。その時タケは37歳で，以来28年間，日赤病院の監督として勤務している。看護婦というと，クリミヤ戦争の野戦病院で寝静まった兵士たちの病室を見廻るフローレンス・ナイチンゲール（1820～1910年）を想起する。そのナイチンゲールの人格，功績を記念するため，ナイチンゲール生誕100年の1920（大正9）年に，赤十字中央委員会より各国の功績顕著な看護婦に贈与するナイチンゲール記章の第1回受賞者となっている[3]。

写真1　病院船 弘済丸婦長の萩原タケ

写真2　萩原タケ女史胸像

その後，看護教育に尽力する傍ら看護婦の組織作りに奔走し，ついに1929（昭和4）年3月に日本看護婦協会の設立に漕ぎつけ，満場一致で会長にはタケが選出された。

タケは少女の頃より愛国者であったが同時に日本赤十字社を背景に国際社交人として活躍した。彼女の愛国は世界に通ずる愛国，赤十字のモットーとする人道（ヒューマニティ）と両立する愛国であった[4]。あきる野市役所五日町出張所玄関前には「萩原タケ女史人道のために国家のために」と題した胸像がある（**写真2**）。タケは1936（昭和11）年5月27日享年63歳で死去した。墓は，あきる野市の広徳寺にある。

参考資料

1）新村 拓，日本の医療史，234-239（2006）
2）諸澄邦彦，医療史跡，佐野常民，*Isotope News*，**669**，15（2010）
3）石井道郎，萩原タケ ナイチンゲール記章に輝く郷土の人，あきる野市教育委員会（2013）
4）あきる野市デジタルアーカイブ・あきる野市ゆかりの人々・萩原タケ
（http://archives.library.akiruno.tokyo.jp/about/hagiwara.html）

（日本診療放射線技師会　諸澄邦彦）